

高橋文治著

『モンゴル時代道教文書の研究』

汲古書院 二〇一一年・一二刊

A5 四九六頁 一一〇〇円

本書は、モンゴル時代の道士や道観に出された当時の特有な文
体で書かれた発令文や公文書をめぐって考察した研究成果である。
その構成は、次の通りである。

口繪 序論 直譯風白話發令文の性格、第一章 全真教文書の性
格とその展開、第一節 太宗オゴデイ癸巳年皇帝聖旨をめぐって、
第二節 附論「孟廟丁酉年免差役賦稅碑」をめぐって、第三節 ク
ビライの令旨二通、第四節 李志常の給文碑、第五節 一二三三
年から一二五二年へ、第六節 「大蒙古國累朝崇道恩命之碑」を
めぐって、第七節 張志敬の給文碑、第八節 餘論「任風子」劇
をめぐって、第二章 發給文書から見たモンゴル時代の道教、第
一節 張留孫の登場前後、第二節 附論「宣授釋教都總統」の出
給文、第三節 至元十七年の放火事件、第四節 武宗カイシャン
と苗道一、第五節 承天觀公據をめぐって、第六節 晉祠至元四
年碑をめぐって、第七節 阿識罕大王の令旨をめぐって、注、あ
とがき、索引、重要引用文獻表

モンゴル史研究においては、典籍史料のほかに、石刻・墓誌銘
などの金石資料が極めて重要な史料と見なされている(吉田順一監
修『モンゴル史研究——現状と展望』明石書店、二〇一一年)。また、遺跡
や書画をも考察することで、様々な分野において、当時の状況に

対する解明が進んでいる。近年発表された成果のうち、道教に関
する著作に限っても、例えば劉永海『元代道教史籍研究』(北京、
人民出版社、二〇一〇)、劉曉「元代道教公文初探」《東方學報》京都
八六、二〇一一年)、景安寧『道教全真派宮觀、造像與祖師』(北京、中
華書局、二〇一二年)などが挙げられる。

だが、モンゴル時代の公文書を解読することによって、政權と
諸宗教との相互関係を究明する、本書のような研究成果は未だ少
ない。その理由の一つに、当時の公文書が特殊な文体で書かれて
いることが挙げられる。これらの文書は、一応は漢文を用いてい
るのだが、それは従来の漢人官僚が常用した文語・雅文とは異な
り、モンゴル語を当時の白話(口語)に直訳したもの(本書が「直譯
體風白話文」と呼ぶ文体)なのである。現代の研究者にとつて、モン
ゴル語の知識を一定程度修得した上で、当時の歴史的状況を把握
しなければ、このように特異な文体で記された文書の解読は、極
めて困難である。

これらの公文書は、当時の道教と他の宗教がどのような関係を
持っていたか、政權がいかに治下の諸宗教を管理し支配したかと
いった事柄について、重要な情報を有している。だが、上述の通
り、残念ながら、これらの文書は未だ十分には究明されていない
のが現状である。

こうした中で、本書は金石史料を駆使しながら、モンゴル時代
特有の難解な文体によって記された文書を読解し、そこで得られ
た手がかりに基づき、当時の道教と仏・儒との争いを分析し、政
權との関係などの諸問題について検討している。これは、モンゴ

ル時代の状況を追究する上で、大きな成果と位置づけられると言えよう。

紙幅の制限により、本稿は簡単な内容を紹介するのみにとどまらざるを得なかった。著者ならびに読者各位のご海容を請う次第である。

(李 翕書)